

平成30年度 第1回 総合教育会議 会議録（要約）

期 日	平成30年7月18日（水）14時00分から16時20分
場 所	雲仙市役所別館 3F 会議室1
出席者	市長部局 金澤秀三郎市長 教育委員会部局 山野義一教育長、徳永 卓教育長職務代理者 平山田鶴子委員、中村妙子委員、森下祐樹委員
説明員	教育委員会事務局 本多教育次長、小松総務課長、柴崎生涯学習課長、 久保田スポーツ振興課長、西川学校教育課主幹指導主事、 松田学校教育課主任指導主事、市田学校教育課主任指導主事 森田総務課参事補（記録）

会議日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
 - （1）子どもたちを取り巻く環境について
 - ①小・中学校のエアコン設置について
 - ②不登校や家庭環境に問題を抱える子どもたちの現状について
 - （2）郷土を守り育てる活動の現状と課題について
 - ①青年層や子どもたちの減少に伴う、地域芸能・文化の継承の問題について
 - ②ふるさとに愛着を持つ子どもたちの育成について
「住み続けたい、戻って来たい」気持ちを育む「ふるさと教育」とは
- 4 その他
- 5 閉会

【14:00 開会】

1 開会

2 市長あいさつ

金澤市長 平成27年度に始まったこの総合教育会議も、本日の会議で通算7回目となり、これまで、「確かな学力を育む教育」、「安全安心な教育環境の整備」、「中学校の部活動の充実」など教育行政に関する多くの課題について活発な意見交換を図ってきたが、本日の会議においても、雲仙市が抱える課題を踏まえ、「子どもたちを取り巻く環境について」と「郷土を守り育てる活動の現状と課題について」をテーマに、意見交換を行いたいと考えている。

議事事項の前にブロック塀について説明

3 議事事項

議事(1) 子どもたちを取り巻く環境について

※事務局から、①小・中学校のエアコン設置について説明する。

金澤市長 事務局より説明があった空調設備については、昨年から協議しており、財政面や子どもたちへの身体的影響も心配されることから慎重な意見が多かったように思う。今回の国の方針転換を受け、小中学校へのエアコン設置について意見をお願いしたい。

徳永教育長職務代理者 昨年の段階では、予算的に導入は難しいとのことだったが最近では40度を越える日もある。「設置はすべき」と考える。他の自治体の状況を考えてもまだ設置を決めていない自治体もあるが、今後はエアコン設置の自治体が増えてくるだろう。現在の気象状況からも、可能ならば設置してもらいたいと思う。一度に設置できないのであれば、まずは中学校そして小学校の順番が良いと思う。予算面で厳しいと思うができれば設置してもらいたい。

平山委員 設置については、「するべきではない」と考える。既存の学校施設の修繕等の依頼がある中で、限られた予算であるがために、現在修繕を早急にやらなければならない箇所から工事をやっているが、まだ修繕が完了していない状況であることを聞いている。避難場所になる可能性のある学校施設が、きちんといい状態ではないことは良くないのではないのか。学校整備へ予算を投じるべきではないのか。そういう環境を整えた上でエアコ

ンを設置すべきと考える。もし、設置するのであれば校舎の最上階から下へ向かって設置した方が良いと思う（上層部が暑いとの理由から）。

中村委員 教育の平等性を考えると「設置すべき」と思う。全国的な設置率は50％程度であるが、東京や京都は100％近い設置率があり、それに比べ長崎県は10％に満たない。教育の平等性を考慮すると、長崎が特別涼しいということではないので、（エアコンを設置するという）環境を整えてやることも一つの考え方であると思う。

設置については、段階的にやるのではなくて、一斉に中学校からやったほうが良いと考える。合併特例債などの資金を前向きに活かすべき。

森下委員 学校環境衛生基準に沿うように運営しなければならいと考え、エアコン設置もやむをえない」と思う。最近環境の変化が非常に厳しくなっている。有利な合併特例債を使えるタイミングがあるのであれば、前向きに設置する方向で進めていただきたい。ただ、問題は設置した後の電気代や修繕等のメンテナンス費用が心配である。設置の順番については、判断が難しいと考える。

山野教育長 テレビのニュース等では、「危険な暑さ」・「熱中症に厳重警戒」と叫ばれている中で、雲仙市の児童生徒は大丈夫なのかと心配になる。（学校環境衛生基準の）室内温度28度以下という数字は、扇風機や網戸、ミストシャワーでは対応が難しいと感じている。子どもの安心安全の観点から、早急に設置すべきであると考え。また、学校施設の耐震化については、既に終わっているので大きな地震が発生しても校舎が倒れるという心配は無い。エアコン設置の順番としては、1教室あたりの平均人数については中学校が多いので、中学校から設置するのがよろしいかと思う。

金澤市長 中学校から設置すると仮定した場合、一度にまとめて設置するというのは困難ではないのか。

本多教育次長 期間的には、早くとも概算で4年程度を考えている。1年目で設計、2～4年目で工事を行うのが適当ではないか。ただ、工事については学校の一部分から行うのではなく、学校毎に行うのが効率的であると考え。

金澤市長 例えば、4年計画で具体的に学校名をあげた計画を明示するのか。

本多教育次長 現段階では明示はできないが、先ほど申し上げた事業期間を3ヵ年で分けることについても、明確な方策やアイデア等について、まだ出されていない。

山野教育長 教室の中であるので、授業を行っている時は工事が出来ない。夏休みしか工事が出来ない（冬休みは期間が短く出来ない）と聞いている。

※事務局から、②不登校や家庭環境に問題を抱える子どもたちの現状について説明する

金澤市長 事務局より説明があった、現在の雲仙市の状況について、感想や意見を願う。

徳永教育長職務代理者 資料を見て、不登校児童生徒がこんなにいるのにはびっくりした。一人ひとりに対応していくには時間がかかるだろうし、大変な仕事だと思う。雲仙市の場合、地域的に広いので、個々を訪問していく形式で行わないとやっていけない状況なのかなと思う。こういう子どもたちは、そもそも（相談できる場所へ）出て来られない。親も相談できる場所に出向いてお尋ねをするとか指導を仰ぐとか、そのような方法が分からないのではないかということで、訪問型というのは今後、もっと大切になるのではないかな。

「出て来い」方式ではなく、こちらから「出て行く」方式になると、担当の先生方は大変になってくるのではないかなと思う。訪問指導員（やスクールソーシャルワーカー（以下SSW））だけでは間に合わなくなっているように感じる。そういうことから、訪問指導員やSSWの増員をやるべきではないかな。

平山委員 これだけの不登校児童生徒がいる中で、訪問指導員（やSSW）が少ないし、本当に凄く大変な事をされていると感じた。訪問指導員を増やしていただければと思った。子ども達が不登校になっている状況で、一番関係してくることは親（育てていらっしゃる方）が関係してくると思う。一度そのようなお子さんをお持ちの親とお話をする機会があったが、『学校に行かなければいけないということが絶対ではないんだよ』と言われた時に、心が少し穏やかになることが出来ました」という意見を聞いた。親と言うのは学校に行くことが当たり前という概念を捨てることが出来ないために、無理してでも学校へやろうとする行動や言動がでたりするがために、益々子供さんは辛い思いをしていらっしゃるのだなと感じた。子供は親の行動を良く見ている。親が変われば子供も変わっていくことを考えたときに、資料に記載されてある「保護者に対する支援」について、更に強化していただければ良い方向へ向かうのではないかな。

中村委員 不登校児童生徒については、すぐに解決できる問題ではないと感じた。訪問指導員の増員も大事であるが、拠点作りも必要ではないかな。「あそこへ行けば誰かがいる、先生がいる」と感じられる拠点が、雲仙市の中間地点にあったほうが良いと感じた。現在、児童生徒サポートセンターは教育委員会事務局の中に設置し対応されているが、敷

居が高いように感じる。

森下委員 安心して気軽に話が出来る環境を作ることが大事ではないかと感じた。現代社会は、両親の共働き等、家庭でのコミュニケーション等が少なくなり、心のゆとりが減ってきている。そのような、ゆとりのある時間をいかにして作るかが大事ではないか。規則正しい生活を各家庭の中で作れるよう指導が必要と感じた。限られた指導員の中で大変と思うが、不登校児童生徒が落ち着いた心を取り戻せるような家庭環境づくりから取り組んではどうか。

山野教育長 訪問指導員とＳＳＷ（スクールソーシャルワーカー）の方には、子ども達ときちっと向き合っていることに、とても感謝している。支援が必要な子や親にいかに寄り添うことが出来るかが課題である。支援が必要な児童生徒が増えると、訪問指導員が足らなくなるのが現状であるが、公民館に場を移すなどして来やすい環境を作っており、これらを充実していかなければならないと考える。

金澤市長 訪問指導員とＳＳＷについて基本的な説明をいただきたい。

西川主幹指導主事 訪問指導員は雲仙市の嘱託職員であり、ＳＳＷは長崎県教育委員会からの配置であり社会福祉士の資格をもっている。

議事（２） 郷土を守り育てる活動の現状と課題について

※事務局から、①青年層や子どもたちの減少に伴う、地域芸能・文化の継承の問題について説明する。

金澤市長 生涯学習課から説明があった現在の雲仙市の状況について、皆様からの感想や意見をお願いします。

徳永教育長職務代理者 芸能文化というのは時代とともに変わっていくものなのかなと思っている。ただ、今ある芸能文化については、継承していく努力は必要と考える。昔から庶民の祭りというのは、生活の中にメリハリをつけ、活性化を図ってきたことを聞いたことがある。そういう意味では、芸能文化を守っていくことは、地域の活性化に繋がるのではないかと考えている。どうしても続けられなくなった時は、何らかの形で記録を残していく必要もあるのではないか。

平山委員 瑞穂町の大正地区の「屯宮祭」は、６名の選ばれた神様が３日続けてお祭りに

参加している。100年以上続くお祭りであり、実際に「神様」に選ばれ参加される方は、3日間連続して仕事を休み、神様に携わる方達も仕事を休み、山車等を出すために（お祝いを頂くものの）多額の費用が掛かる等、このままでは、この祭りは続かないのではないかと危惧している。今後続けていく上で皆が意見を出し合い、例えば初日と最終日のみ参加する、移動が不要な1箇所で行う等、「屯宮祭」に限らず、祭の形態を変える工夫をしていかないといけない。

中村委員 地域の人口減少（若者の減少）により郷土芸能が続かなくなっている。高齢者の方は郷土芸能の知識が豊富な方もいらっしゃると思うが、それを、どこで、どういった方法で継承していくかが課題であるが、いつのまにか途切れてしまっている。（郷土芸能の衰退により）地域の繋がりが希薄になったように感じる。

森下委員 どこの地域も人口減少により制限があり、費用の問題があり、郷土芸能の存続が難しくなっている。将来に向かって伝えていくためには、先ず記録（映像等）の保存が先決ではないか。祭等の詳細を知っている方は高齢者がほとんどであるので、記録を残すなら今しかない。また、継承する上で地域だけでは限界があるので、学校行事の中で披露したり話をして頂いたりすることも手ではないか。

※事務局から、②ふるさとに愛着を持つ子どもたちの育成について説明する。

金澤市長 協議のポイントとして、地域と連携したいいわゆる「ふるさと教育」に類するものはこれまでも大小行われているが、新しく定住促進対策につなげる効果を期待されていることを理由に、改めて何か新しいメニューを加えんとするなら、どういったことが考えられるのか。また、「ふるさと教育」に期待する効果とは何なのか。皆様から意見はないか。

徳永教育長職務代理者 人口減少が一番の問題であると思われるが、様々な取組みのなかで大事だと思うことは、子どもの時から経験・参加をすることである。このことにより、ふるさとの良さが心の中にずっと残っていく。そういう意味では、学校も大きな役割を持つし、また果たしていかなければならない。どこの学校も農業青年部の手を借りて田植えから稲刈り、もちつきまでの一連の取組みを行っているが、近年は一部の学年に限定しているようだ。各学校、年間授業時数がかなり厳しいことから、体験学習が減っているため、対策、工夫が必要だと感じた。また、昨年の少年の主張大会で、発表者が地元のイベントを題材にしており、地域の方が一生懸命されている様子を見て自分も手助けがしたいと発表し、頼もしく思うのと同時にふるさとに愛着を持つ子どもを育てることに繋がると感じた。

平山委員 島原で、高校生と一緒に開発して作ったそうめんを販売しているのを見て、とてもいい取り組みだと思った。自分達が作った製品ができるわくわく感とそうめんができる課程も体験できる。私の自宅の製材所で、小学2年生のまち探検を受け入れ、製材機で木を削る様子や木の曲がり具合を見せたが、子ども達がすごく興味を持ち質問をしてくれた。普段、通り過ぎている場所でどんなことをしているか知る機会がないため、今後も継続していただきたい。夏祭り等地域のイベントについても、遠方に住んでいる人が帰省する楽しみの一つになっている。人口減少対策については、婚活イベント等が増えているので良い傾向にあると思っている。

中村委員 先日、「県・市町教育委員合同研修会」に出席した際、人口減少対策として県がふるさと教育に力を入れていると聞き、20～30年後の先を見据えた対策が大事だと感じた。人口減少対策として、自分が学校現場にいた時にも体験学習をしていたが、単発的な取り組みに終わり、次に繋げていなかったように思う。産学官が連携して、地域との繋がりを増やししながら子どもを育てていかなければならないと言われているが、人が集まる拠点づくりを自治会などにもっと細かく分散して、そこを盛り上げる取り組みができないか考えている。

先日の研修会で対馬市の取り組みとして、「小中学校の学びを土台として、高校生が取り組んでいること」について事例発表があり、ふるさとの職業人と地域の子も達を出会わせることをテーマにされていた。企業と連携して商品開発をしたり、企業・漁協・官公庁の方を講師に迎え学習を進めたり、地元で誇りをもって仕事をしている人に出会わせる取り組みなど、子ども達が現場に出向くことで色々な繋がりを密にすることができ、ふるさとに愛着を持てるようにできないか。このような事業をなされている中で、私が学校現場にいる時に、(前述のような事業を)どこに問い合わせたらいいのか、誰に聞けばいいのか分からないことがあり、人材バンクのような整備があった上で、学校現場に提供してもらえれば、もう少し活用できるのではないかな。

森下委員 この時代、人口減少は避けて通れず、また都市集中は仕方のないことだと考えている。福岡県を例にすると、糟屋町や新宮町が(人口の増加率)上位に入っている。これらの町を見てみると、大型施設やマンションが建設されており、環境より施設が整っている方が人間は寄りがちだと感じた。雲仙市ではどうなのか考えてみると、若者が集まる施設はないし、今後それができるかと思うと、人口減少が進んでいる中では難しい。何もない良さを伝えるには、各地域で地道にされている祭りや、地域の方と児童生徒との交流を継続していくことが大事である。

南串地区では、中学生が産業まつりに積極的に参加しており、ここ数年ではほとんどの生徒が実行委員会の会議の段階から参加してもらっている。子ども達もお祭りを楽しみにしており、会場が人でいっぱいになるほど集まり、とても嬉しく感じている。

私の店（精肉店）でも中学校の職場体験を受け入れており、職場体験だからといって特別なことをやらせるのではなく、普段店で行っている仕事を体験してもらい、仕事の大変さを肌で感じてもらっている。

住みやすい環境をいかに伝え、また地域の方との交流を深めながらそういう活動に繋げていくことが、住み続けたい・戻って来たいという気持ちを持たせることになるのではないかと。また、各主要産業（南串地区では農業・漁業）において、子ども達にそのよさを伝えていくことが大事である。

山野教育長 定住促進対策はどこの自治体も大同小異であり、雲仙市だけが人口を増やすことは至難の業である。これからの雲仙市について考えなければならないことは、少ない人口でどのような社会を構築していくかということであると考えます。民間企業では、働き手不足を解消するために様々な策を講じている企業（の業績）が伸びている。大人が広い視野を持って発言し、行動に繋がないと子ども達がかawaiiそうだと感じる。

金澤市長 「人口減少対策における学校教育の役割として発達段階に応じたふるさと教育の展開」は県の政策なのか？また、いつからなのか？

山野教育長 県の教育政策となっている。

小松総務課長 もともとは、平成27年に策定された長崎県教育大綱のなかで、ふるさと教育について記載があり、それを継続してきている。

金澤市長 先ほど中村委員が発言された対馬市の取り組みについて、来年度より小浜高校のビジネス観光科が学科より消えるが、人生の目標となる観光業の方達と巡り合える機会が増えれば良いと思う。

千々石地区のお祭りについては、名（みょう）単位で行うため7年に1度回ってくるが、名の役員は全員羽織袴を着用し、子どもも皆参加している。そのため、地域を支える大人の姿見て、それが特別なお祭りであることを無意識に認識すると思う。そのような機会をずっと与えられるようにしていく必要がある。

山野教育長 危機感を抱き、子ども達に伝えていくことを考えるが、その繋がりが途中で途切れることが一番の問題である。

【16:20 閉会】